文章中で用いられる同一語句のくり返しの定量的研究

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻国語学専攻分野
鯨井綾希

論文要約

・目次

第１部　序論 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 9
　第１章　本論文の目的と意義 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 11
　　１．１　本論文の研究対象と分析手段 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 11
　　１．２　研究上の着目点 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 15
　　１．３　本論文の意義 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 16
　第２章　研究背景 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 19
　　２．１　くり返しはどのようにとらえられてきたか ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 19
　　２．２　くり返しを取り上げた研究の現状と課題 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 26
　第３章　本論文の概要 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 29
　　３．１　研究動機と研究背景のまとめ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 29
　　３．２　本論文の構成 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 30
　　３．３　既発表論文との関係 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 32
　　３．４　本論文における留意事項 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 32

第２部　本論 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 35
　第１章　連文における名詞句のくり返し形式 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 37
　　１．１　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 37
　　１．２　先行研究 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 37
　　１．３　分析資料と分析方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 38
　　１．４　分析 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 39
　　１．５　おわりに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 47
　第２章　同一語句のくり返し量の多寡とそれに伴う文体変化 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 49
　　２．１　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 49
　　２．２　分析上の手続き ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 50
　　２．３　分析結果 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 56
　　２．４　分析結果の考察 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 59
　　２．５　まとめ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 64
　第３章　同一語句のくり返し量の漸次変化と文章展開との対応関係 ＿＿＿＿ 67
　　３．１　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 67
　　３．２　先行研究 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 67
　　３．３　分析上の手法と資料 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 68

3．4　分析結果–くり返し語の増減に関わる文脈的特徴–　70
3．5　まとめ　77
第 4 章　接続表現による内容変化と同一語句の継続使用　79
4．1　はじめに　79
4．2　先行研究　80
4．3　分析資料と方法　82
4．4　分析結果と考察　83
4．5　まとめ　93
第 5 章　接続表現を契機とした同一語句のくり返し量の変動　95
5．1　はじめに　95
5．2　先行研究　96
5．3　資料と方法　96
5．4　分析の結果と考察　98
5．5　まとめ　104
第 6 章　学校教科書から見た同一語句のくり返しの使用場面　107
6．1　はじめに　107
6．2　先行研究　108
6．3　分析資料と方法　109
6．4　分析　113
6．5　結論と今後の課題　118
第 7 章　表現媒体の違いと同一語句のくり返しとの対応関係　121
7．1　はじめに　121
7．2　調査上の対象・資料・方法　121
7．3　調査結果　124
7．4　ジャンルごとの性質から見た調査結果の解釈　129
7．5　まとめ　131
第 8 章　同一語句のくり返しと書き言葉・話し言葉　133
8．1　はじめに　133
8．2　先行研究　133
8．3　研究資料と分析方法　134
8．4　考察　136
8．5　まとめ　143

第 3 部　補論–同一語句のくり返しとその周辺–　145
第 1 章　指定指示の「この／その／ゼロ」が付与されたくり返しの文脈的特徴　147
1．1　はじめに　147
1．2　先行研究　148
1．3　分析上の資料と方法　149
1．4　分析結果と考察　151
1．5　まとめ　159

第 2 章　指示代名詞「それ」の使用規則と同一語句のくり返し ＿＿＿＿＿ 161
2．1　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 161
2．2　先行研究 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 162
2．3　分析 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 163
2．4　まとめ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 171
第 3 章　同一語句のくり返しの用法差を利用した特徴的な接続表現の抽出 173
3．1　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 173
3．2　本章に先立つ第 2 部の第 4 章および第 5 章との関係 ＿＿＿＿＿ 174
3．3　分析資料と分析方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 175
3．4　分析と考察 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 178
3．5　まとめ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 181

第 4 部　結論 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 183
第 1 章　各部・各章のまとめ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 185
1．1　はじめに ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 185
1．2　第 2 部・本論および第 3 部・補論の研究成果 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 186
第 2 章　総合的考察–同一語句のくり返しが用いられる状況– ＿＿＿＿＿ 195
2．1　いかなる内容展開でどのように使用されるか ＿＿＿＿＿＿＿＿ 195
2．2　いかなる意識の下で使用されるか ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 198
2．3　いかなる言語要素と関わりを持つか ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 200
2．3　全体の結論–同一語句のくり返しが用いられる状況– ＿＿＿＿＿ 200
第 3 章　本論文の研究上の意義と今後の課題 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 203
3．1　本論文の研究上の意義 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 203
3．2　今後の課題 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 204

1. 本論文の目的と意義

1. 1. 本論文の研究対象と分析手段

1. 1. 1. 研究対象となる同一語句のくり返しの文章論上の重要性

本論文は、日本語の文章中に現れる同一語句のくり返しの諸相を、主に定量的な観点から分析する研究である。

同一語句のくり返しは、海外でも日本でも 1970 年代から取り上げており、文章論やテクスト論の中では比較的早くから注目されてきた現象であると言える。具体的には、以下の下線部と波線部との関係が、「同一語句のくり返し」として認められるものである。

（1）むかしがあったそうです。あるところに、爺と婆とがあったそうです。爺は山さ薪とりにいったし、婆は川さ洗濯に行ったそうです。婆が洗濯しているると、上の方から桃こがつんぶらつんぶらと流れてきたそうです。

（出典：関敬吾（編）（1956）『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』岩波文庫）

（1）は、有名な昔話「桃太郎」の導入部分である。「爺」と「婆」という二人の人物が登場し、引用中で「爺」という語は初出の後に一度、「婆」という語は初出の後に二度、くり返し用いられる。さらに（1）の物語中で「婆」は「洗濯」に行くが、この「洗濯」という語も、破線部分が付加されて文機能としては名詞から動詞に変更されているものの、形式的にはくり返しとして用いられていると言える。

ところで、文章は個々の文の単なる累積ではなく、文のそれぞれが何らかの形でつながりを持ち、相互関係を結ぶことで、初めて一つの単位として認識できる存在である。その「何らかのつながり」は、前後で述べられる特定の表現を指定する指示語や、ある二つ以上の言語表現の関係性を示す接続詞のような明示的な言語的要素から、言語化された諸表現の背後に潜む省略や背景知識まで、様々にあり得る。

本論文で取り上げる（1）の波線部のような「同一語句のくり返し」も、そうした「つながり」を保証する手段の一つであり、その中でも、指示語や接続詞と同様に、言語的に明示されるつながりであると言える。この点で、同一語句のくり返しは、日本語学を含む言語学という学問分野において取り上げられるべき存在である。しかも、本論文の分析結果で改めて示すこととするが、同一語句のくり返しは、指示語や接続詞のように文章次第では使われないことがある言語的つながりではなく、ある程度の長さを持つ文章の中において必ず使われる言語表現であるという点に特徴がある。すなわち、同一語句のくり返しは、文章という単位において必須に近い成分であり、文章を言語学的に分析するにあたって欠かすことのできない研究対象であると考えられる。

しかしながら、従来の研究における同一語句のくり返しの分析は、文章中に現れたものの一部を対象にして、その生起理由を個別に説明することが多かった。現象そのものの全体像や網羅的な記述は、文章中に現れるくり返しの量が膨大であるためか、分析上の観点として導入されることは少なかった。

1. 1. 2. 分析手段としての電子データとコンピュータおよび計量

一方、2011 年に完成した電子データである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ と表記）によって、膨大な実例を個人で収集できるようになり、またパーソナル・コンピュータの性能の向上により、膨大な用例の傾向を定量的に分析することが以前よりも容易になった。電子データとコンピュータを利用した言語事象の分析自体は国立国語研究所が早くから行っており、それほど新しいものではないが、近年の研究動向は、個々の研究者レベルで同様のことを行えるようになってきていることが特筆すべき点である。

そうした潮流により、文章中における同一語句のくり返しについても、その様相を個別的に分析するだけでなく、網羅的な収集に基づいて分析し、その出現の傾向を明らかにすることが可能になってきている。ただし、個人レベルで行う電子データとコンピュータを用いた言語研究は、その普及が比較的最近のことであるため、その活用方法も現状ではそれほど多岐に渡るわけではない。日本語学における電子データの有効性は、多くの場合、大量の用例を容易に収集できるという点に求められているように見受けられる。分析自体は、従来の研究方法に基づいて定性的な側面に重点が置かれ、量的な分析は質的分析を補助する程度にしか活用されていないことも多い。

しかし、大量のデータを扱える電子データとコンピュータによる分析は、統計的な視座の積極的な利用こそが、有効な方法論である。膨大な用例の収集を様々な角度から定量化し、その計量結果や統計的性質を分析することで、視覚的に分析可能な用例数・方法論では必ずしも見えてこない傾向性を見出すことが、電子データとコンピュータを用いた日本語研究の新たな可能性であると考えられる。

同一語句のくり返しは、一つの文章中のある一節を取り上げただけでも多くの箇所で現れる。したがって、少なくとも人手の作業としては、大量の文章を取り上げてその量的傾向を分析するのが非常に難しい研究対象である。しかし、電子データとコンピュータを用いれば、同一語句のくり返しを網羅的に取り出し、その特徴を分析することが可能になる。つまり、同一語句のくり返しは電子データとコンピュータを用いた分析と相性の良い研究対象であると言える。

従来のくり返しの研究の多くは、少数の文章を資料として定性的な分析を行うことがほとんどであり、大量の文章を分析対象として、膨大な量のくり返しの使用からその傾向を明らかにしていくことは行われていない。したがって、従来の研究成果を参照しつつ、電子データとコンピュータを用いて同一語句のくり返しの現れ方を集計し、観点に応じて様々な統計的手法を施し、整理することで、文章中における同一語句のくり返しの新たな側面を明らかにしていくことができると考えられる。

以上により、本論文では、従来定性的な分析が多くを占め、文章中における全貌が必ずしも明らかになっていなかった同一語句のくり返しを取り上げ、電子データやコンピュータを積極的に利用して定量的観点からその実態を分析することで、同一語句のくり返しという現象の実態を明らかにすることを研究目的として設定した。

1. 2. 研究上の着目点

文章中における同一語句のくり返しという現象を詳らかにするためには、以下の点について調査し、実態解明を行う必要がある。

（2）a. 同一語句のくり返しという現象は文章中にどんな形でどのくらい現れるものなのか。
　　b. 同一語句のくり返しという現象は文章のどのような特徴に連動して増減するのか。

上記の二つは、どちらも現象の記述であり、実態解明のために最初に行わなければならないものである。しかしながら、これらの問題を定性的な分析で解決するのは難しく、従来の研究でも上記二つを研究目的に据えて徹底的に分析していくことはなかったと言える。そこで、本論文では上記二つを研究目的に据え、それを解決するために、以下のような二つの研究方法を設定し、分析を進めることにした。

（3）（2a）を解決する研究方法：
　　BCCWJ のデータを利用して、多くの文章を分析対象に取り上げ、それぞれで同一語句のくり返しの量を種々の観点から計量し、平均的な出現量や出現量の振れ幅、形態ごとの出現の量的様相などを分析する。

（4）（2b）を解決する研究方法：
　　BCCWJ に含まれる様々なレジスターや文章内における構造・展開の様相を把握できる言語要素（接続表現など）を利用して、それらと同一語句のくり返し量との連動関係を調査し、変動の様相を分析する。

（3）の研究方法により、文章中で同一語句のくり返しがどのくらい現れるのか、あるいはくり返しの形態ごとの使用量等について、その一般的な量的範囲を発見することができると考えられる。また、（4）の研究方法により、同一語句のくり返しの量が多くなったり少なくなったりする原因を、文章という一つの言語的単位との関係の中で発見することができると考えられる。

2. 結論

2. 1. はじめに

本論文の第 1 部・序論では、文章中で用いられる同一語句のくり返しを研究する意義と研究する上での背景を述べるとともに、目下の研究課題を指摘した。第 2 部・本論においては（2）の研究課題を考察し、解決することとした。なお、(2a)の観点に基づく研究は第 2 部・本論の第 1 章と第 2 章で行い、（2b）の観点に基づく研究は第 2 部・本論の第 3 章から第 8 章で行った。

また、第 3 部・補論においては、同一語句のくり返しと他の言語要素を関係づけたり、同一語句のくり返しの文法的側面を論じる方向性もあることを、補足的にではあるが検討した。

第 4 部・結論では、第 2 部と第 3 部の分析結果をまとめ、同一語句のくり返しがどのような文章上の特徴の中で使用されるのかを総合的な立場から明らかにした。

2. 2. 全体の結論–同一語句のくり返しが用いられる状況–

2. 2. 1. 第 2 部・本論の結論

本節で、以上に述べてきた分析視座により考察を進めた結果、明らかになったことを述べる。まず、本論文は、文章中で頻出する言語的事象であるにもかかわらず、あまりにも頻出する要素であるため、その網羅的な記述が難しかった同一語句のくり返しを取り上げ、量的困難さを解決するために電子データとしてのコーパスと、コーパスを処理するコンピュータを用いて、同一語句のくり返しの定量的分析を網羅的に行い、その実態を明らかにすることを目的として考察を進めてきた。目的を達成するための具体的な研究課題を（2）のように定め、その解決方法を（3）および（4）で示した。

以上の研究課題の解決を目的とした分析である第 2 部の各章の結果を総合的に捉え直すと、文章中における同一語句のくり返しは次のような状況で用いられると言える。

（5）名詞句による同一語句のくり返し形式

a. 名詞単独のくり返しは、連文中で主名詞相当である傾向にあり、その情報価値の変動に一定の偏りがあるわけではない。
b. 修飾部を含む名詞句全体のくり返しは、「A の B」という形が最も多い。
c. 項を従わない動詞・形容詞・形容動詞を修飾部に持つ名詞句のくり返しは、その半分が形容詞を伴うくり返しである。
d. 項を従えた動詞を修飾部に持つ名詞句全体のくり返しの動詞部分における項は 1 つだけである。
e. 名詞句を複合・分離した場合のくり返しは、その量的傾向に偏りはない。

（5）は第 2 部・第 1 章の結論である。名詞を主とした語句の基本的なくり返し方が（5）のようであると押さえておくことで、以降で指摘する定量的な分析における同一語句のくり返しの内実を、常に把握しておくことができる。

（6）名詞による同一語句のくり返しの出現量

a. 文章のまとまりごとにおおよそ 15%から 30%の割合で名詞のくり返しを行う。
b. ある程度の長さを持った文章では、同一語句のくり返しは必ず用いられる。

（6）は、第 2 部・第 2 章での結論である。（6a）から、文章中においてはあくまでも新出の語句がその大勢を占め、それを補足する形で、くり返しが行われていることを指摘できる。また、（6b）から、同一語句のくり返しは必ずしも量的に多いものではないが、その使用は文章中で必ず見られるという特徴を持つことも分かった。

（7）同一語句のくり返しが用いられる特定の場面

a. 論の帰結（結論やまとめ）の文脈でくり返しが集中的に用いられる。

b. 対比の文脈でくり返しが集中的に用いられる。

（7）は、第 2 部の第 3 章から第 6 章の各章の分析結果に共通して現れた特徴であり、同一語句のくり返しが用いられる場面として代表的なものであると考えられる。

（8）文章展開に伴う同一語句のくり返しと新たな見出し語の増減（4 段階）

a. 話題の開始時（第 1 段階）では、新たな見出し語は増加し、同一語句のくり返しは減少する。

b. 話題の前半部（第 2 段階）では、新たな見出し語は増加を続け、同一語句のくり返しは増加に転じる。

c. 話題の後半部（第 3 段階）では、新たな見出し語は増加を続け、同一語句のくり返しは減少に転じる。

d. 話題の終了時（第 4 段階）では、新たな見出し語は減少に転じ、同一語句のくり返しは増加に転じる。

（8）は文章展開に応じたくり返し量の変化を論じた第 2 部の第 3 章から第 5 章の結果を総合的に捉え直した結果である。（7）のような特定の場面のみならず、一つの話題の展開に伴い、(8)に示した 4 段階の語の使用の様相が見られることが分かった。

（9）同一語句のくり返しの割合が大きくなる場合の書き手の意識

読み手を意識して対他性を帯びる文脈：

a. 読み手に何らかの行動を促し影響を及ぼうそうとする意識を持つ場合。

b. 自らの意図を読み手に明確に伝えようとする意識を持つ場合。

（9）は第 2 部の第 2 章と第 3 章および第 7 章と第 8 章の分析によって明らかになったことをまとめたものである。（5）から（8）が、専らくり返しの文章中での現れ方を分析したものであるのに対し、（9）は、そのようなくり返しがどのような書き手の心理的変化に基づいて出現するのかを明らかにしている。

2．2．2．第 3 部・補論の結論

第 2 部が本論文における考察の軸となる研究であるのに対し、第 3 部は同一語句のくり返しと関わる周辺領域を研究対象として取り込み、それらと同一語句のくり返しとの関係からどのようなことが言えるかを検討する部分である。第 3 部の第 1 章と第 2 章は指示語と同一語句のくり返しとの関連を論じ、第 3 章では接続表現と同一語句のくり返しとの関連を論じている。

まず、第 1 章では同一語句のくり返しに付く連体詞としての「この」「その」を取り上げ、そうした形式が付かない「ゼロ」形式のくり返しと比較することで、それぞれの形式がどのような文構造・情報構造の下で用いられるのかを分析した。分析の結果、

それぞれの形式ごとに以下のような特徴があることが明らかになった。

（10）a.「この」を伴うくり返し：
- ・専ら文の前半で、題目的な役目を担う助詞とともに用いられる。
- ・くり返しに使われる名詞は具体的な文脈により意味を与えられるものが多い。
- ・要素の並列提示や要素の比較、補足や話題変更の文脈で使われやすい。

b.「その」を伴うくり返し：
- ・専ら文の前半で、題目的な役目を担う助詞と共に用いられる。
- ・くり返しに使われる名詞は性別や身体部位など、人間に関わる具体的な語が多い。
- ・典型的な順接や逆接が付加される文脈で使われやすい。

c.「ゼロ」によるくり返し：
- ・文の前半で使われるが、文の後半でもある程度使われる。
- ・並列的要素やその一例を提示する助詞と共に用いられる。
- ・くり返しに使われる名詞は「日本」「黒」など一義的な意味を持つ語が多い。
- ・「こう」「そう」によって前文脈との関連性を動詞部分に持たせる文脈で使われやすい。

（10）により、「この／その／ゼロ」の各形式が付加されて行われる名詞のくり返しは、様々な使用上の偏りを持っていることが分かった。

続く第 2 章も引き続き指示語に関わる研究であるが、同一語句のくり返しに付く連体詞の有無の分析が主目的であった第 1 章に対して、第 2 章では名詞句のくり返しと互換性を持ち得る「それ」という指示代名詞を取り上げ、その使用規則を検討することを通して、くり返しを使う場面と「それ」を使う場面の差異化を試みている。

分析の結果、名詞句を指示する指示語「それ」を使用可能な条件として、以下のような規則を見出すことができた。

（11）○代入規則
- (a)「それ」によって表現される文の意味と矛盾しない情報が付与された名詞句を代入せよ。
- (b) 先行詞の候補が一つであれば、その名詞句を代入せよ。
- (c) 先行詞の候補が複数ならば、一つに定まるまで次の条件を番号順に実行せよ。ただし条件 3ab のみが同時に出たときは確定不能とみなす。
  - 1.「それ」の係り先の動詞に合う名詞句を代入
  - 2.〈名詞句＋読点＋「それ」を先頭に置く文〉という定型表現の名詞句にあたる名詞句を代入
  - 3a.「それ」から距離の近い名詞句を代入
  - 3b.「は」によってマークされた主題となる名詞句を代入

○維持規則

（d）「それ」の値として代入された先行詞は基本的に変更されない。

（e）代入された先行詞が改めて明示された場合、「それ」の値は取り消される。

○代入規則と維持規則の関係

（f）規則（e）が適用されない場合、先行詞の変更には代入規則と規則（d）との衝突による曖昧性が生じる。

（11）の規則は「それ」に先行詞となる名詞句が正しく格納され得る条件であるため、この規則から逸脱したり、規則中にあるような「確定不能」な状況や「曖昧性」の生じる状況が出たりした場合には、指示語はくり返しの代用とはならず、文章中では必然的に同一語句のくり返しが用いられると考えられる。

補論の第 3 章は、第 2 部の第 4 章および第 5 章から派生したものであり、同一語句のくり返しと接続表現との関係を論じた研究である。第 2 部の第 4 章や第 5 章のように接続表現を指標として用いたときとは反対に、同一語句のくり返しの使用状況から見て、接続表現そのものの特性の違いを論じた。

第 3 章では以上の観点から、接続表現の用法差について同一語句のくり返しの使用との関連で論じた結果、以下のような特徴を指摘できた。

（12）a. 接続表現は、前文脈からの展開の必然性をどの程度認めるかという軸を共通性の高い特徴として持っている。

b. 接続表現のうち、要素を列挙するという内容展開や、前文脈への志向性がなく、後文脈の提示のみに重点が置かれる内容展開は、接続表現の中で特殊性の高い用法である。

（12）の指摘は、文章中である程度の長さを持った前後文脈を想定したときの、前後のつなげ方に関わる特徴の指摘である。したがって、語句同士を結びつける場合に用いられる接続表現には（12）の指摘が必ずしも当てはまるわけではない。しかし、同一語句のくり返しに注目して接続表現を分析することで、(12) のような側面を浮かび上がらせることができた点で、くり返しと接続表現とを結びつけて論じることが可能であることを、第 3 章で示すことができたと考えられる。

3. 本論文の研究上の意義

これまでの結論を踏まえ、本論文の研究上の意義を本節で述べる。

同一語句のくり返しに関する第 2 部・本論の結論である（5）から（9）の五つの用法は、文章の構造や展開に応じた局所的・個別的な分析が中心であった従来の研究に対して、種々の資料・側面から網羅的に記述した結果、明らかになったものである。したがって、ここで明らかになった同一語句のくり返しの文章上での現れ方は、少なくとも日本語という個別言語に関して言えば、一般性を持ったものである。

本論文の結論は、日本語の文章における、語句を用いた情報構造の一端を明らかに

するものでもあり、日本語の文章がいかなる形で成立するのかという問いに対する答えの一つになる。日本語学上の価値は、この点にも求めることができると考えられる。

また、本論文の結論に一般性があるということは、日本語で文章を作成する際の情報の示し方として、ここでの結論を他者に教授できることを意味する。すなわち、国語として日本語を学ぶ人や外国語として日本語を学ぶ人への作文教育に応用することも可能であると考えられる。特に、第 2 部・本論の結論のうちの（7）から（9）は、文章中でどのように、かつどのような意識の下で自らの語彙を運用して内容展開を行うのかを明らかにしたものであり、文章を構成する上での適切な伝達姿勢とでも呼べる側面の教授に応用できるであろう。

一方、本論文はどちらかというと日本語の一般性に関わる側面を詳らかすることに重点を置いているため、日本語の位相的側面の記述はそれほど積極的に打ち出しているわけではない。しかし、第 2 部の第 7 章は、種々の表現媒体を利用して、同一語句のくり返しの表現媒体ごとの違いを論じている。その点で、位相的側面をどのように整理するかという研究課題を考察する上での契機も、本論文中に含まれていると言える。

同様に、同一語句のくり返しという現象を、どのように文法的問題と関連づけるかという問題も、第 3 部の諸考察においていくつか示しており、その考察の契機は本論文中に含まれている。さらに、本論文は文章論的見地からの考察であるが、語彙をその主たる分析対象としている点で、文章論と語彙論との関連の仕方も具体的に示していると考えられる。すなわち、本論文によって、文章論に関わる諸問題を、語彙論や文法論の問題に結びつけながら解決する方法の一端を示すことができたと思われる。